

アキニレの木の下で

四街道総合公園は体育館や陸上競技場などのスポーツ施設に加えフィールドアスレチック、ローラー滑り台などの子供向け遊具、更に自然林や池もある、文字通りの総合公園です。この公園の植栽には何故かアキニレが多
用されていて、特にBBQのできる野外調理場近くには数十本の純林があります。

秋になれば色々な野鳥が餌を求めてやってきますが、その顔ぶれや飛来数は年によって異なります。

今月初旬に鳥の写真仲間からマヒワが来
ているとの連絡を受けて見に行った時の
写真が右のものです。(2023.11.6)

2羽が枝先にぶら下がっている場面で
すが、黄色に色付いた葉が写っているだけ
と言われそうです。

アキニレの種子散布は風を利用するタイ
プですから実が目立って鳥に食べられる
のは避けたいところです。敢えて目立た
ないように葉陰に隠しているのだと思い
ます。

ところが目ざといマヒワに見つかってし
まい、餌になっている訳ですからアキニ
レは苦笑しているでしょう。

冬も深まれば樹上の実は無くなります

が、その頃になるとアキニレの根元の地面においているマヒワをみる事が
あります。樹上での捕食の難を逃れた
種子が再度狙われ餌となっているようです。(2011.2.6四街道総合公園にて)



同じく風散布のカエデ類も目
立たない実を付けています。

一方で果肉を鳥に食べられて
種子を散布してもらうタイ
プの実は目立つ色彩で鳥を呼び
寄せるのと対照的です。

ところでマヒワがアキニレの
種が大好きなのは分かっていた
だけだと思いますが、その他
には何を食べて生きているの
でしょうか。

私が見たのはハンノキ、メマツ
ヨイグサの種、ケヤキの新芽で
すが、生きるためには毎日欠か
さず何かを食べている筈です。

そのメニューが詳細には行かなくても少しでも分かれば鳥類保護の上で大いに役立つと思っています。

有る時、野鳥と木の実に関する本を書いている叶内拓哉氏に会う機会があったので、アマチュアの観察者からも
広く情報収集したらどうかと話した事がありますが、乗り気ではありませんでした。

NACS-J、野鳥の会などが中心になって呼びかけるなら協力出来るのですが・・・ 佐倉市 坂本 文雄

カエデの話

1 世界に誇る紅葉

この頃のテレビを視聴していると、季節柄、そしてコロナ禍後の時節柄、外国人が日本の紅葉にとっても感動している映像を度々目にします。

わが国には 26 種のカエデ類が自生し、欧州 12 種、北米 10 種をしのいで、中国に次ぐ数（山と渓谷社「紅葉と落ち葉」）だそうです。またその半数ほどが固有種です（保育社「原色日本植物図鑑」ほか）。南北に長くて亜寒帯から亜熱帯に及び多様な気候、3,000m 余に及び標高差と複雑な地形、これらの要素があいまって多種多様なカエデ類を生み出し、世界に誇る紅葉風景を創出していると言えそうです。

2 千葉県のカエデ類

千葉県内に自生するカエデ類は、イロハモミジ（重鋸歯縁、径 3-7 cm）、オオモミジ（細鋸歯縁、径 7-11 cm）、ウリカエデ、エンコウカエデ、オニイタヤ（以上写真）、チドリノキ（次ページ）の 6 種類と考えて概ねよろしいかと思えます。なお、イタヤカエデ類の分類については諸説あるようです。



イロハモミジ(秋) オオモミジ(秋) ウリカエデ(秋) エンコウカエデ(秋) オニイタヤ(5月)

千葉県で紅葉と言えば、養老溪谷が関東地方的には有名ですが、小櫃川上流の七里川溪谷や亀山湖周辺もなかなかのもの、そして知る人ぞ知る小糸川上流の高宕林道沿い（車両通行止め）も見事です。

これらの多くは房総丘陵特有の急傾斜地で、その中心的存在はイロハモミジです。保育社「原色日本植物図鑑」では、タカオカエデ（＝イロハモミジ）について「山の谷間に普通」とあり、分布は暖帯と記しています。また、河出書房新社「房総の生物」では、「カエデ類は、幹や枝は細くてしなやかで、葉は薄い膜状で面積のある割には軽い。（中略）根は発達し、崖地の斜面でも体をささえることができる。」と解説しています。このような特性は、切れ込みの多い掌状の形やプロペラ型の種子と併せて、まさに生態的地位（ニッチ）を示す典型と言えます。

3 「モミジ」の語源

カエデの語源が「カエル手」との説は、よく知られているものと思えます。

さて、以下は、朝日選書「植物と行事」からの抜粋、引用（受け売り）です。

「モミジ」とはもともと、植物が色づくことを意味する「もみつ」という自動詞の名詞形「もみち」に由来しています。万葉集ではこれらの言葉が登場する歌が 100 を超え、それらの中で「黄葉（もみち）」など黄色系を当てたものが全部で 8 割を超えています。万葉歌人（貴族とは限らない）にとって生活域で身近だったのはコナラやクヌギと考えられます。また、ハギやカツラ等も「もみち（黄葉、黄変）」と歌われています。彼らにとって「もみち」は必ずしも紅葉を意味していなかったようです。

それではカエデはどう表現されていたかと言うと、「わが屋戸（やど）に黄変（もみ）つ蝦手（かえるで）見るとに妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し」（万葉集）。この歌で



平成 26 年 12 月 1 日 高宕林道にて

は、「蝦手」はまさに「モミジ」のことで、「黄変（もみ）つ」は、黄や赤に限らず色が変わることです。

平安時代になると濁音化した「モミジ」や「紅葉」の文字が現れ、やがて、皇族や貴族たちが親しんだ京都嵐山に代表されるそれらとなっていきます。

4 ちょっと変わったカエデの仲間

4-1 チドリノキ（右写真）

図鑑や関連サイトでは、ほとんど必ず「クマシデやサワシバと似ている」と書かれています。右写真は、何十年も前に県内で採取して図鑑に挟んであったものなので、対生のものがバラけてしまっています。葉縁は重鋸歯ですが、側脈が14対ほどで図鑑の説明より少ない？でも、基部の形等確認してみると、チドリノキに間違いなさそうです。

千葉県では東大演習林猪ノ川林道沿いなど、近県では奥多摩の御岳山沢筋や朝霧高原毛無山沢筋で見かけました。

和名は、翼果の付き方をチドリが飛びさまに見立てたもの（東書選書「日本植物記」）だとか、ちょっと可愛くてロマンチックです。酔っ払いの千鳥足とは関係なさそうです。



4-2 ハウチワカエデ（右写真）

和名は「羽団扇楓」の意味で、葉の形を天狗が持つ羽で出来た団扇（羽団扇）に例えたもの。国内では、北海道および本州の温帯に分布し、関東地方や近隣の山でもよく見られます。

花は、カエデの仲間にしては大きくて目立ちます。某サイトには、「見ごたえのある紅葉になることや、印象的な花を咲かせることで古くから庭木として普及する」とあります。現物を見ると、なるほどと納得できます。雄花と両性花が混生とか、暗紅色のものはガクだとか、何やら色々と秘密がありそうです。



平成30年5月、御坂山地にて

4-3 メクスリノキ（右写真）

若い頃から何だか特殊で遠い存在のものと思い込んでいましたが、丹沢や御坂山地など、関東近隣の山でも見られます。

古くから枝葉を煎じた液を目薬に使ったことから「目薬の木」と名付けられたとか。現代ではサプリメントに利用されることはあっても、医薬品に利用されることはないようです（ご確認ください）。

カエデ類としては変わり者の3出複葉、国内自生種ではミツデカエデが同様の特徴です。写真のとおり紅葉がとてもきれいです。



令和5年11月 朝霧高原にて

4-4 ヒトツバカエデ（右写真）

千葉県から比較的近い山梨県内の山（標高1,500m前後）を歩いていると、葉が大きいカエデの仲間として、ウリハダカエデやハウチワカエデ、ヒトツバカエデなどが目に留まって楽しいものです。紛らわしいのがオオカメノキで、こちらも対生で丸い形。でも分布が2,000m前後の亜高山帯で、花や実、よく見れば葉脈の様子なども違います。



平成28年5月 三ツ峠付近にて

5 最後に

千葉市の泉自然公園では、何故ここに？と思えるカエデ類に出逢えます。一方、房総の紅葉の見ごろは、温暖化の影響（と思われる）でまだまだ12月上旬もOK。是非お出かけください。

（記：茂原市 望月力智）

切り株からニャーと聞こえたよ

11月16日、松戸市の紙敷石みやの森に近所の保育園児が森遊びに訪れました。午前中の活動として森の散歩と広場でハンモックに乗り、丸太渡り、竹うま、竹ぽっくりを体験していきました。10月にも別の保育園児が森遊びに訪れ、秋は予約で予定表が埋まります。

森の入り口で活動ボランティアの私たちと挨拶を交わし、森へと入っていきます。フクロウが営巢していたスタジイの枯れた様子、途中から折れたイヌシデ、110 を超える年輪を持ったサワラなどを説明するのが習わしになっています。

森の様子の話は、大人は「そーなんだ」で済むかもしれないが、幼児相手に同じ話でいいのだろうか？と思って、10月のイベントで園児たちが帰った後に、目に見える「秋の葉っぱはどんなだろうね」、「葉っぱの色や形の違うものさがし」程度のことを動機づけしてみたいかがですかと仲間内で提案してみた。

すると先日の11月の訪問日には「森には黄色や赤、大きい小さい、丸い・ツルツルなどいろいろな葉っぱがありますから探して見て」と案内係が説明して、森の中にあるたくさんの葉っぱのなかから探してみるように動機づけをしました。大人の働きかけが子どもの気づきにつながるのではないかと期待しました。

大きな葉っぱ、黄色の葉っぱ、赤い葉っぱを見つけて子どもたちは喜んでいました。森の散歩を終えて、ハンモックや丸太渡りをひとしきり遊びました。

そのあとのことです。子ども二人がしゃがんで地面を見つめています。近づいてみると切り株をじっと眺めています。「ニャーと声がした」というのです。一人の子が聞いたらしく、もう一人の子は付き添ってじっと切り株を見ていました。私が近づいて切り株を見てみると直径15センチほど真ん中に1センチ幅で縦に7センチほどの亀裂が入っていました。

そこから声がしたとの主張です。しばらく亀裂の穴を眺めていましたが、声がする様子はありませんでした。ほかの子がやってきて輪に加わり、亀裂に枯れ枝を突っ込んでしまいました。声の主を探している子はそれでも待ち続けていました。

指一本がようやく入る亀裂に「ニャー」と鳴く主が入ろうはずもなく。大人の世界なら「妄想よ」とでも言われて片付けられてしまいそうです。

声の主を待ち続けていた子どもには聞こえたのでしょうか。ひよっとすると絵本や子ども向けのビデオ、映画の一場面と同じような光景があったのかもしれませんが。記憶に残っている映像や場面がよぎったのでしょうか。「となりのトトロ」のように子どもには見えて、大人には見えない世界、あるいは「押入れの冒険」のような話の場面設定なのかもしれないと思うと何だか楽しくなりました。



(松戸市 藤田 隆)